

『死の棘・アスベスト』を読む

表題と写真は、2014年6月に出版された神戸新聞経済部次長兼編集委員の加藤正文さんによる「怒りと告発」の書である。

本の帯裏側には次のように記されている。かつて「奇跡の素材」と喧伝されたアスベスト(石綿)は、有害な「悪魔の素材」にもかかわらず、世界各国で大量使用されてきた。髪の毛5000分の1の微細な繊維は、吸引すると長い潜伏期間をへて中皮腫や石綿肺などの病気を引き起こすリスクがある。しかし、国は「管理して使えば安全」として十分な規制を怠ってきた。その結果、大勢の市民が犠牲となり、いまでも危険にさらされ続ける。

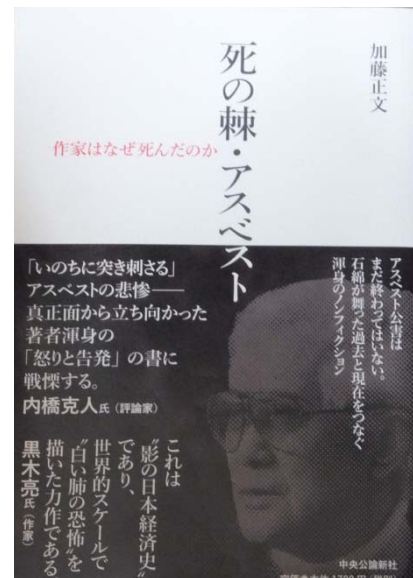
作家・藤本義一氏の中皮腫死は何を伝えるのか。大震災のがれき処理はどうだったのか。兵庫・尼崎、大阪・泉南、そして欧米、アジアなど国内外の「石綿都市」の現状は…。明日の被害を防ぐには、患者を掘り起こし、石綿が舞った過去と現在をつながなければならない。

「生産・流通・消費・廃棄の経済活動の全局面で複合的に被害を与えるストック災害」(宮本憲一)であり、近代化の初期に大量使用され、経済成長が一段落するところに、「死の棘」が本性を見せる。これが複合型ストック災害の恐怖だ。

第一線のジャーナリストらしく、内外にわたるきめ細かい取材と調査による「渾身のノンフィクション」であり、とりわけ第1章「作家はなぜ死んだのか」は引き込まれる感じで読み進んだ。「2012年10月30日、直木賞作家で深夜番組『11PM』の司会などで知られた藤本義一が亡くなった。享年79歳。死因は「悪性胸膜中皮腫」。アスベストの吸引が原因とされる特異ながんだ。潜伏期間が長く、吸引してから十数年から50年ほどで発症する。…作家はどこで石綿を吸い込んだのだろう。」作家の足跡をたどりながら、「死の棘」・アスベストの正体に迫る。

2006年7月17日のレポートに書いたが、深刻なアスベスト被害の「クボタ旧神崎工場」付近を歩いたことがある。JR 尼崎駅から数分のところにあった工場近くの「浜つばめ団地」をめざした。「にっぽん再発見 この町に生きた足跡を求めて」という番組を見て、この団地を知ったからだ。階段を上がると、すぐ近くに工場があったことが分かった。ここで中学時代は体操の選手であった48歳の男性が中皮腫で亡くなった。

尼崎にはJR 福知山線の脱線現場にも何回か行った。やはり現場に行ってみると、事故や事件が実感できる。二つの現場にまた出かけてみよう。



(2014年9月27日)